秋田県立博物館研究報告第34号　17～20ページ　2009年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.34, 17-20, March 2009

白岩焼の調査資料集成Ⅰ

－紀年銘および製作者銘のある資料－

庄内　昭男*　藤原　尚彦**

１．はじめに

白岩焼は、江戸時代後半に旧角館町白岩で操業が開始され、以後県内のやきもの需要に応えるように明治時代後半まで生産が続けられた。その白岩焼の製品の内11点が工芸品として県指定有形文化財となっている。

現在、白岩寺後地区と前郷地区の六カ所に窯跡が確認されている。江戸時代後半から明治時代初頭までに、寺後地区のイ窯（上窯あるいは儀三郎窯ともいわれる）・ロ窯（下窯あるいは吉五郎窯ともいわれる）の二窯で操業が行われ、生産の主体となったものは、甕・鉢や灯火具などの生活雑器であったが、藩の保護を受けていたことから武士階級の嗜好品である茶道具なども生産していた。幕末には藩による保護体制がゆるむとともに寺後地区に一カ所、前郷地区に三カ所の窯が新たに築かれ、イ窯・ロ窯・ハ窯（勘左衛門窯）・ニ窯（孫兵衛窯）・ホ窯（多一郎窯）・吉重郎窯の六窯時代には年間数万個の製品が生産され、明治期には秋田県全体のやきもの需要にこたえるまで発展していった。

展示に関連して資料調査を進めているうちに、製品の中に、製作者と製作年代が線書きされた資料を見かけるようになった。窯跡の調査が行われていない現状から、これらの資料で白岩焼の技術的変遷を見通せる要素があると考え、ここに紹介した。

２．資料について

以下、紀年銘の古い順序に紹介していく。

①仏花瓶

＜成形・内外面処理＞口縁部が欠損している。少し肩が張る体部に、太い筒状で口が開く口頸部がのっている。体部と口頸部の高さの比率はほぼ一対一である。頸部の下位には、左右対称に耳が付いている。底部にはやや太めの高台が付き、高台にえぐり込みが一カ所ある。底辺から高台内を除いて、オリーブ黒色の釉薬が掛かっている。

＜線刻文字＞頸部に幅３㎜ほどの深さがある線で、年号および製作者の名前が記されている。

②線香立

＜成形・内外面処理＞上面からみると長方形を呈し、ほぼ中間にしきりが付き、二つの方形の区画に分かれている。底面は平坦で素地のままであり、表面の口縁から体部にはオリーブ黒色の釉薬が掛かっている。

＜線刻文字＞文字は、底面全体を意識して書かれており、箆先を当てて楷書体のような書き込みである。年号と離れた位置にある「カン」は製作者名を省略したものと推測される。

③水盤－秋田県指定有形文化財－

＜成形・内外面処理＞口がほぼまっすぐに立ち上がる浅い鉢状の本体があって、それをささえる足が三本付いている。底面は赤褐色の化粧が施され、口縁部の外側から内底までは白色の釉薬が掛かっている。

＜線刻文字＞文字は高台の内側全体を意識して書かれており、行書体で軽妙なタッチにみえる。配置は右が年号、左が作者名である。

④水盤

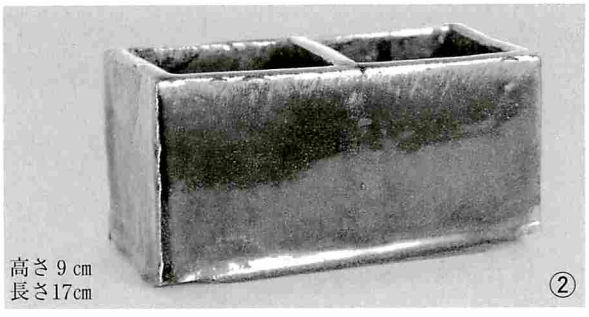
＜成形・内外面処理＞口がまっすぐ立ち上がる浅い鉢状の本体があって、体部の底には高台が巡っており、高台の外側に本体をささえる足が三足付いている。口縁は波状を呈しており、体部の表面は縄をころがしたような細かい凹凸があり、光沢のある暗赤褐色の化粧が施されている。また、体部には浅い沈線が三条巡っている。内側には、白

*　**　秋田県立博物館

色の釉薬が掛かっている。
＜線刻文字＞文字は高台の内側全体を意識して書かれており、行書体で軽妙なタッチにみえる。配置は右が年号、左が作者名である。文字の配置は③と異なっているが、中央にある高橋多一郎の名は③と共通しており、ホ窯で作られたものと推測される。

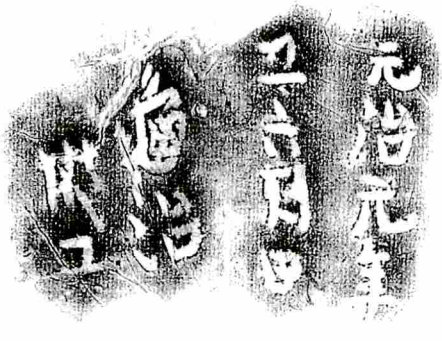
⑤仏花瓶
＜成形・内外面処理＞球形の体部に先端が大きく開く口頸部がのっている。体部と口頸部の高さを比較すると、口頸部の方が高い。口頸部の下位には、左右対称に耳が付いている。底部には細めの高台が付いている。底辺から高台内には赤褐色の化粧が施され、口縁から体部上半には青白色からオリーブ黒色の釉薬が掛かっている。
＜線刻文字＞体部上位に幅２㎜ほどの深さがある線で、寄進者した人物名と年代が記されている。

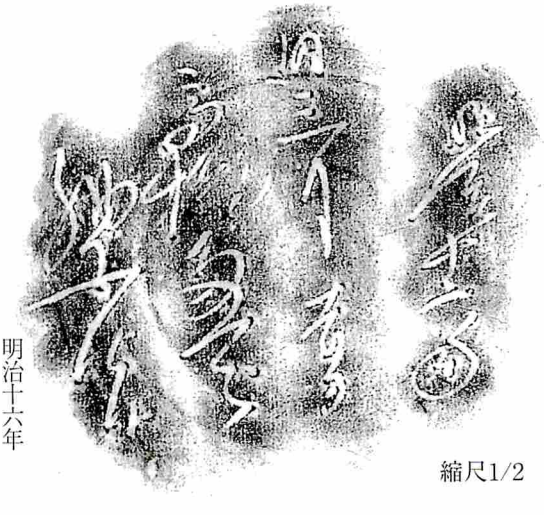
高さ31cm
底径11cm
①


高さ９cm
長さ17cm
②

白岩寺
安政六 カン
申二月日
縮尺1/2

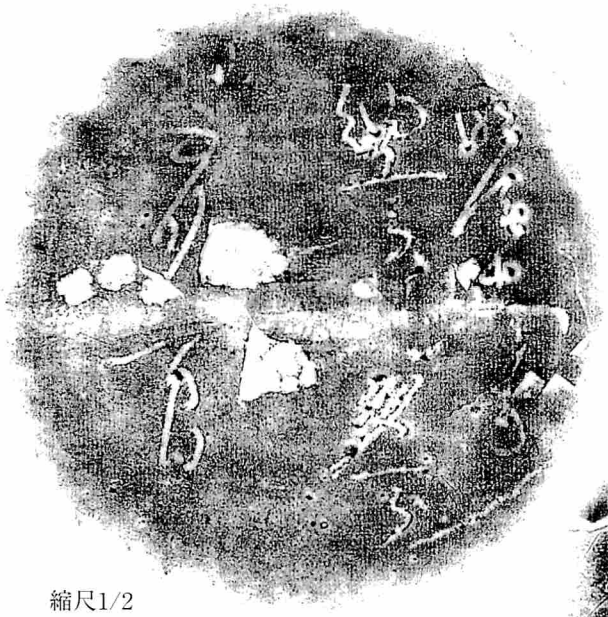
高さ９cm
口径33cm
③


元治元年
丑六月日
亀治
成工
縮尺1/2


明治十六年
旧三月吉日
高橋多一郎
納品仕候
縮尺1/2

高さ12cm
口径36cm

④



縮尺1/2

明治十□年
納工□□多一郎
旧五月吉日

高さ38cm
口径32cm

⑤

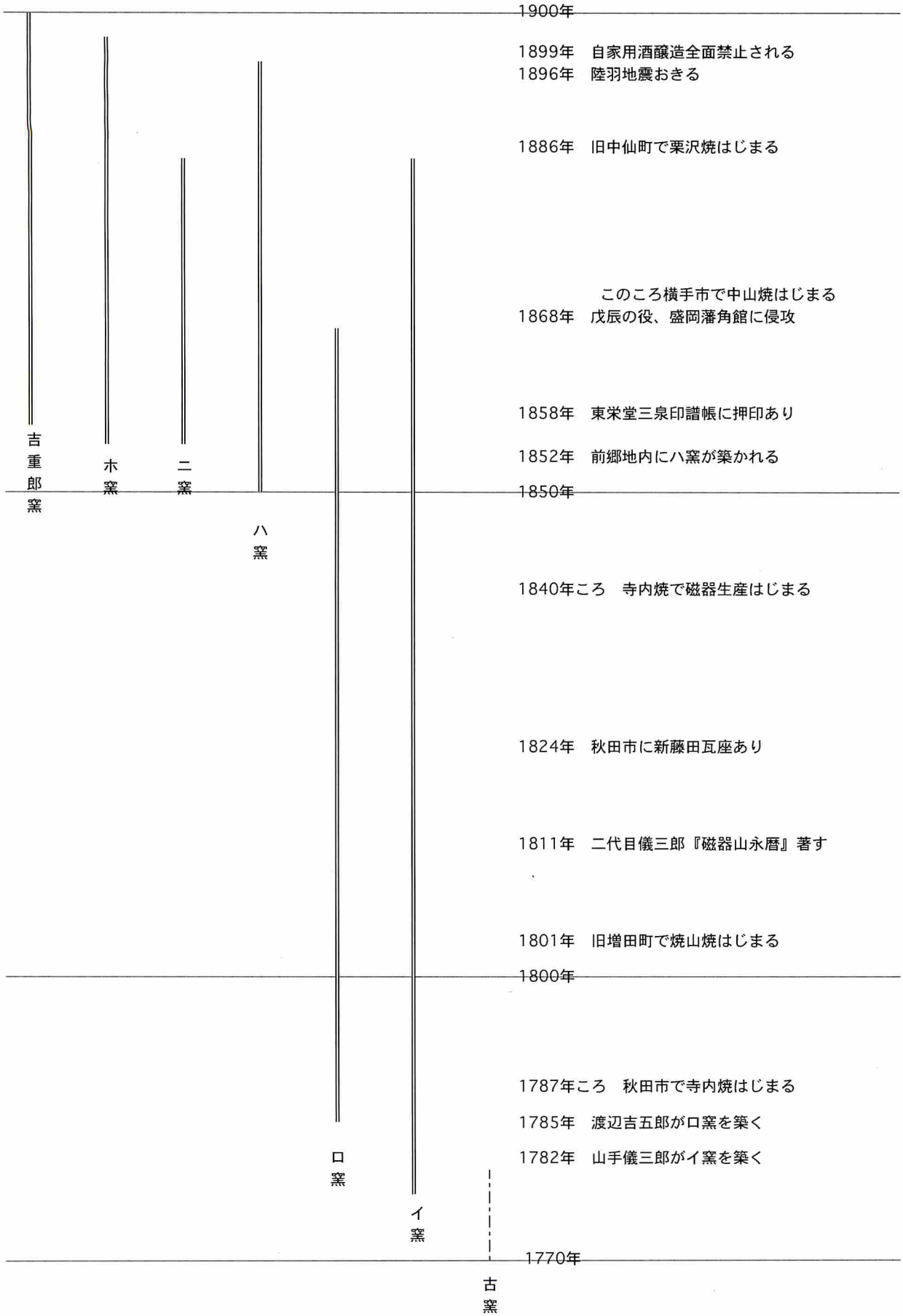
宝壽院
政山良榮居士
清水村賢木
施主
伊藤良吉
明治三十三年
旧八月二日

縮尺1/2

一部は釉薬が掛かり拓本に写せなかったが、透けていて読み取ることができた。

3．まとめ

①・③・⑤の資料は、雲巌寺の所蔵品である。寺後地区の窯跡から見える位置に立つ雲巌寺は、中世からの歴史がある名刹であり、古くから民衆の信仰を集めてきている。①・③は、製作者自身が雲巌寺に奉納したものと考えられる。ところで⑤には作者ではなく、寄進した人物の名前が記されている、記載された明治三十三年は、白岩焼の吉重郎窯が操業を終えた年であることや、寄進者が中仙町の人物であること、中仙町に開かれた栗沢焼の創業者が雲巌寺の檀家であり、創業者名が付された線香立が雲巌寺に存在することなどから、⑤は栗沢焼である可能性が否定できない。

②・④は現在個人蔵であるが、②には「白岩寺」の記述から雲巌寺に奉納されていたものである可能性がたかい。④は、③とともに水盤であり、共通する製作者名が記されていることから、製作者自身による継続的な献納があったことが推測される。

白岩焼と窯業関連の年譜